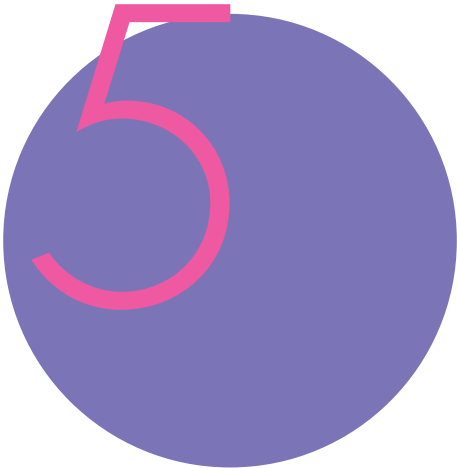


第5章 まとめ



第5章 まとめ

本章では、大学での全般的な学習状況（第2章）、英語運用能力の修得状況（第3章）、大学生活に対する意識（第4章）について本調査から得られた結果を概括する。

5.1 大学での全般的な学習状況

第2章では、大学での全般的な学習状況を確認することを目的に、大学における授業内外の学習経験、1週間の過ごし方、各種の能力やスキルの入学時から現在までの増減それぞれについて検討した。授業での経験頻度に対する回答から、現在の大学教育では出席重視の授業が多く実施されており、定期的に小テストや課題が出されていることが読みとれた。学生たちは、課題を作成するために、図書館の資料よりもWeb上の情報をひんぱんに利用していることもわかった。インターネットを使って課題の授受がなされることも多く、1年生にとって課題を作成したり提出したりするときにインターネットが欠かせないツールとなっていることがうかがえた。また、7割以上は期限までに課題を提出しており、半数程度の学生が提出した課題に対して教員から添削やコメントをつけて返却された経験をもつ。

一方、授業内容と社会や日常生活のかかわりについて説明を受けることや、仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ機会がひんぱんにあるはいえない。大学で学んでいる内容が、社会や日常生活、将来の仕事とどのように結びついているのかについて、学生たちはあまり実感できていないことが読みとれた。それに加えて、学生が自分の考えや研究を発表することも多くなく、実験、実習、フィールドワークなど体験型の学習や学生が主体的にかかわる授業は少ない傾向にあった。授業をつまらなく感じたり、授業中に居眠りをしたりする学生も多く、半数近くが授業を欠席や遅刻していることも踏まえると、入学から半年以上経つと気が緩んでくるようだ。

大学内での他者とのかかわりに目を移すと、TA（大学院生の授業補助者）やSA（上級生の授業補助者）から補助を受けることは全般的にみてそう多くはないが、教員に親近感を感じることに比べれば多くなっていった。かかわりをもつ相手が学生になると、授業中や授業時間外に授業内容について話す頻度は高くなる。このことから、1年生にとっ

ては、同級生が最も近い存在であり、それに比べて上級生や大学院生はやや遠くなり、最も疎遠な存在は教員であることがうかがえる。実際、授業中に教員の考えや意見に異議を唱えることはもとより、将来のキャリアについて教員に相談したり教員の研究プロジェクトに参加したりする学生はほとんどいなかった。

このことは、1週間の活動時間の結果からも裏づけられる。図5.1は、1週間あたりの活動時間について活動内容別に平均値を示したものである¹⁾。オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する時間は、1週間のうちでわずか17.7分であり、「全然ない」と答えた学生は8割にものぼっていた。

他の活動内容についてみていくと、学生たちが授業や実験に多くの時間を割いていることがわかり、「出席することが重視される」との回答が多かったことと符合する結果が得られている。1週間に5日間通学すると仮定すれば、1日あたり平均3.2時間（2コマ程度）授業に出席している計算になる。それ以外の時間の多くを、アルバイトあるいはサークル活動に学生たちは費やしているが、この2項目については長時間費やす者と短時間しか費やしていない者に二極化している傾向がみられた。いずれにせよ、多くの学生たちは大学での授業以外にもアルバイトやサークル活動、余暇などの活動場面をもち、そこでさまざまな経験を積み、学生生活を満喫していることがうかがえる。その反面、授業時間以外に勉強や宿題をすることや、マンガ、雑誌以外の本を読むことは少なかった。学生たちは復習や予習といった自主的な学習に費やす時間よりも多くの時間を、アルバイトや余暇、サークル活動に費やしていることが見受けられた。

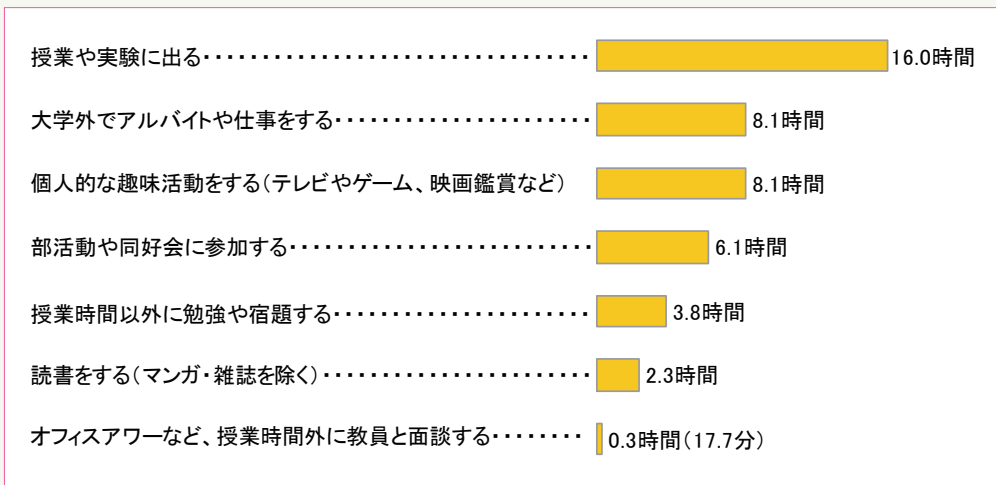


図5.1 活動内容別、1週間の平均活動時間

それでは、大学の授業（平均16.0時間）と自主学習（平均3.8時間）を合わせた週20時間弱の学習を通じて、学生たちは入学後にどのような能力や知識を身につけたのか。それはもっぱら専門分野や学科の知識であり、その次に多いのは一般的な教養であった。このことから、入学から約半年間で1年生が修得した知識は、学問的な基礎知識に偏っていることが読みとれる。その背景には、大学教育における基礎知識を1年生のあいだに修得すること、つまり、当該専門分野の基本的な概念の理解に比重を置いたカリキュラム編成があると考えられる。

また、コンピュータの操作能力が高まった学生も多い。このことは、授業課題のためにインターネットやコンピュータのスキルが大学での学習には欠かせないという前述の考察と整合性のある結果といえるだろう。

それに比べれば、実践的な能力あるいは応用力が高まった学生は少ない。分析力や問題解決能力、批判的に考える能力は高次の思考プロセスであるため、基礎知識よりも修得することは容易ではない。基礎知識の十分な理解があってはじめて、応用力も身につくと考えられるので、基礎知識ほど短期間に急上昇することはないだろう。

また、多少なりとも一定期間、トレーニングを積まなければ修得できないような能力、たとえば時間を効果的に利用する能力やプレゼンテーション能力、文章表現の能力についても、入学後半年間ですぐに、学生全員が高められるわけではなかった。さらに、外国語の運用能力や数理的な能力については、他の能力に比べ、能力が伸びた者の割合が少なく、逆に能力が下がった者が多かった。これらの能力は修得するためにも、修得した能力を維持するためにも、継続的なトレーニングが必要だと考えられる。

学問的な基礎知識やコンピュータの操作能力に続いて、入学後に高まった学生が多い能力は、コミュニケーション能力を中心とした対人関係スキルであった。これらの能力は、授業から直接修得しているというよりは、友人とのやりとりや、アルバイト、サークル活動といった大学での生活全般を通じて修得していると考えたほうが自然だろう。ただし、ここでの対人関係スキルは、比較的身近な他者と関係を構築、維持する能力に限定されている可能性がある。その傍証として、第1に、異文化の人びとに関する知識に比べて、異文化の人びとと協力する能力やグローバルな問題の理解についてはあまり高まっていない点、第2に、それと関連性の強い、地域社会や国民が直面している問題の理解もそれほど深まっていない点があげられる。それらの原因が異文化の人びとと協力する機会が少ないことにあるならば、なおさら、学生たちは自身と異なった価値観や行動様式をもつ他者と関係を築くためのスキルを身につけることは、むずかしいだろう。

5.2 英語運用能力の修得状況

(1) 英語運用能力の熟達度の現状

本調査では、学士課程教育の成果を測定する場合に大学および専門分野を問わない共通指標として、英語運用能力の修得状況に注目した。詳細については第3章に示したとおりであるので、ここではCEFRの尺度にもとづく5つの英語運用能力（聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力）のバランスを確認する程度にとどめる。

図5.2は、英語運用能力について初級レベル、具体的にはA1もしくはA2と回答した者の割合を、入学時と調査時に分けて示したものである。このグラフは、分布が外側に張り出ているほど当該英語運用能力について初級レベルの者が多く、逆に、分布が中心に近づいているほど初級レベルの者が少ない、つまり中級あるいは上級レベルの者が多いことを意味する。図5.2をみると、会話力が他の4つの能力に比べて外側に突き出ていること、読む力でやや出っ張りが少ないことの2つが確認できる。言い換えれば、全体的に会話力は初級レベルの者が多く、一方、読む力は初級レベルの者が少ないということである。

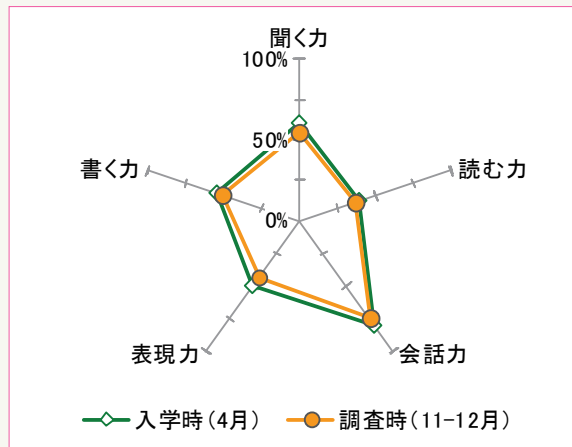


図5.2 英語運用能力が初級レベルの者の割合

入学時と調査時を比べると、全般的に分布が少し小さくなっている。なかでも、聞く力、会話力、表現力については、初級レベルの減少が相対的に大きいことから、聞く力、会話力、表現力は、全体として中級もしくは上級レベルに高まったといえる。それに対して、読む力と書く力については初級レベルの割合はそれほど減っていなかった。

続けて、中級あるいは上級レベル、具体的にはB1からC2までのいずれかを回答した者の割合を入学時と調査時に分けて示した図5.3を確認する。先程の図5.2と違い、図5.3

は分布が外側に突き出ているほど当該の英語運用能力について中級あるいは上級レベルの者が多く、逆に、分布が中心に近づいているほど初級レベルの者が多く、つまり中級あるいは上級レベルの者が少ないことを意味する。図5.3をみると、読む力と表現力では中級あるいは上級レベルの者が多く、対照的に、会話力は中級または上級レベルの能力をもつ学生が少なくなっていた。

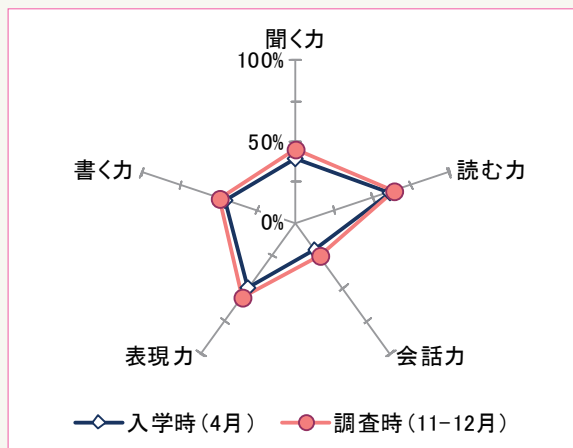


図5.3 英語運用能力が中級・上級レベルの者の割合

入学時から調査時までの変化をみると、調査時の分布は入学時のそれよりもひとまわり大きくなっていることがわかる。別の言い方をすれば、全体的に英語運用能力が高まっているということである。ただし、ここでも図5.2と同様、読む力と書く力は変化の幅は相対的に小さい。それに比べると、聞く力、会話力、表現力については、中級あるいは上級レベルの者の割合が増えていることが読みとれる。

以上のことをまとめると、全体的に中級以上のレベルが多かった英語運用能力は読む力と表現力であり、初級レベル、特に最も基礎的な段階が多かったのは会話力であった。その傾向は、入学から半年後の調査時においても変わらなかった。しかし、入学時から調査時までの変化に注目すれば、聞く力と会話力、表現力については能力の高まりが相対的に大きく、読む力と書く力の高まりは小さくなっていた。このことから、大学での英語教育は、聞く力、会話力、表現力の底上げに寄与していることが示唆される。

(2) 英語運用能力の熟達度の変化

次に、入学時の熟達度レベルに比べて調査時までには英語運用能力が上昇したのか、低下したのか、それとも変化しなかったのかについて調べた。5つの英語運用能力それぞれ

れについて、入学時から調査時まで上昇した者の割合、変化がなかった者の割合、低下した者の割合を示したものが図5.4である。なお、分布を見やすくするために図中には目盛軸の数値を掲載していないが、中心が0%、最も外側が100%になるように設定してある。上記2つのグラフと同様、分布が張り出しているほど回答割合が多く、分布が中心に近いほど回答割合が少ないことを意味する。これをみてわかるように、入学時の英語運用能力を持続する者が半数以上を占めていた。それに対して、入学後に英語運用能力が高まった者は全体の30%にも満たなかった。さらに、少数ではあるが、入学時から調査時にかけてレベルダウンする者もみられた。聞く力で上昇した者が多く、読む力で低下した者の割合が高くなっていることが読みとれる。とはいうものの、おおむね正五角形に近い分布をしており、5つの英語運用能力のうちいずれかが、突出して伸びているわけでも、極端に下がっているわけでもないことがわかる。

さらに、入学時の熟達度レベルを起点として、調査時にどのレベルに到達したのかも確認した。レベルの変化の仕方については、5つの英語運用能力それぞれに特徴がみられたが、第3章で詳しく述べたのでここでは繰り返さない。全般的な傾向として、入学時に初級レベルだった者ほど、その後レベルが高まっていた。一方、中級あるいは上級レベルに到達していた場合は能力を伸ばす者よりもレベルダウンした者が多かった。つまり、入学時に初級レベルだった学生は、大学での英語教育を通じて英語運用能力を高めていたが、入学時に中級以上のレベルだった場合には、能力を高めることよりも下げってしまうことのほうが多いということである。要約すれば、現在の大学での英語教育は学生たちの英語運用能力を一様に高めるわけではなく、場合によっては入学時の能力の維持さえも、むずかしくしている可能性が示唆されたのである。

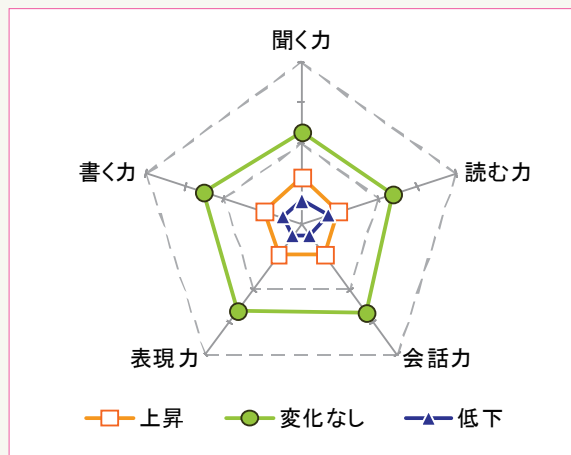


図5.4 入学時から調査時までの英語運用能力の変化

5.3 大学生活に対する意識

大学教育の質を向上させるためには、大学の授業内容の充実はもとより、より良い教育環境を提供することもまた必要である。そこで第4章では、大学の教育内容や教育環境に対する学生たちの評価について検討した。

大学生活に対する適応感をみると、ほとんどの学生が友人関係を構築することに成功しており、学生向けサービスの利用や時間管理についてもうまくいっている学生が相対的に多かった。だが、大学が求める水準に応じて学習することや効果的に学習する技能の修得といった大学での勉強については、うまくいっている学生とそうでない学生に二極化している様子が見られた。さらに、大学教員の学問的な期待を理解することや大学教員と顔見知りになることに成功している学生は少ない傾向にあった。以上の結果は、友人とは授業内外でひんぱんにかかわっている一方で、教員との交流機会は少なく、教員に対してあまり親近感を感じていない、という第2章の結果とつじつまが合う。

大学での勉強や教員との交流について成功している学生はそう多くはないが、だからといって、充実した学生生活を送っていないというわけでもなさそうである。8割以上の学生が自身の学生生活に対して充実していると答えており、学生たちは大学の勉強や教員との交流以外の場面で、学生生活を充実させるための楽しみを見つけていることがうかがえる。しかしながら、充実した学生生活を送れていない学生も少なからずいた。その要因を検討するためには、より詳細な分析が必要であろう。

続けて、大学における教育内容と、それを下支えする設備や学生支援制度に対する満足感を検討した。図5.5は、大学教育に対する満足度について満足（「とても満足」および「満足」との回答の合計）と不満（「不満」および「とても不満」との回答の合計）の割合を比較したものである。全般的にあって、大学教育に対する満足度はそれほど高くはなかった。そのなかで満足度が高い項目は、他の学生と話をする機会と大学での経験全般であり、どちらも大学教育以外からの影響を受けやすいものである。前者については、これまでの分析結果を踏まえれば、友人関係の構築に成功し、友人との交流機会が多いことが、満足度の源泉になっていると考えられる。また、後者の大学での経験全般についても、学生たちが1週間のなかで多くの時間をかけている活動内容をみれば、満足度を高める要因が大学教育以外にもあることは想像にかたくない。

個別の学習指導、援助や教員と話す機会については、不満に感じている者が満足している者を上回っていた。入学後に大学教員とかかわる頻度が少なく、顔見知りになることにもあまり成功していなかったことと照らし合わせれば、本調査に回答した学生の多くは、大学教員と親しくなりたいと望んでいると推測することができる。にもかかわら

ず、学生たちから大学教員に近づくことはほとんどない。第2章で示したとおり、授業中に教員に意見を言ったり、オフィスアワーを活用したりする者はわずかである。このようなギャップをどのように埋めていくのか、その解決策を見出す必要があるだろう。

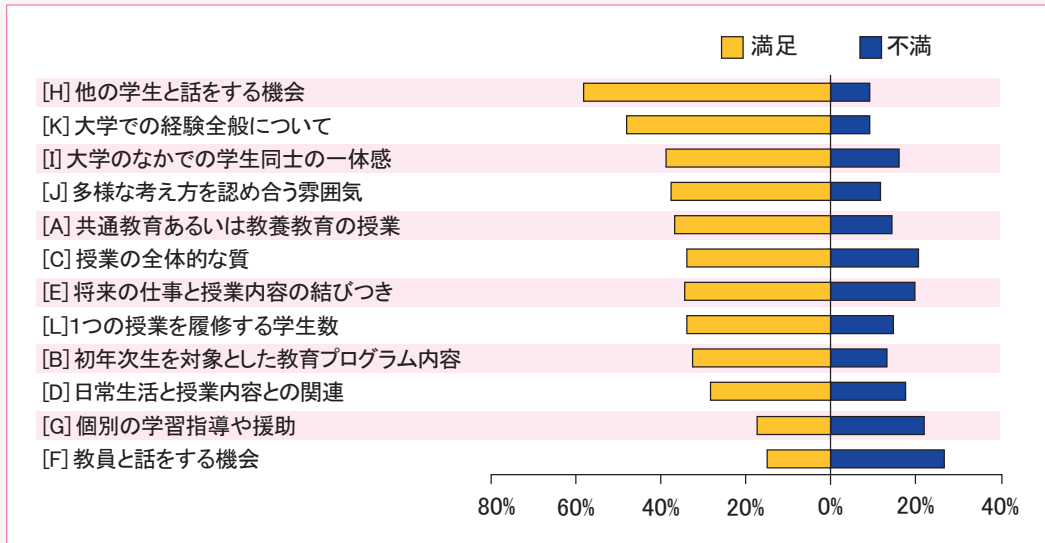


図5.5 大学教育に対する満足感（満足と不満の割合）

大学の設備や学生支援制度については、図5.6に示したように、図書館やコンピュータの設備や援助といった日常的に多くの学生が利用できる設備や施設に満足している学生が多かった。その一方で、学生全員が利用するとは限らないような設備や学生支援制度については、満足でも不満でもなく「どちらでもない」という中間的な回答が多かった。たとえば、実験室の設備や器具、奨学金などの学費援助の制度、キャリアカウンセリングである。全般的にいて、大学の設備や学生支援制度に不満を感じている学生は少ない傾向にあった。

以上の分析結果にもとづき、今後、連携4大学で相互評価を進めるとともに、より詳細な分析をおこなう予定である。

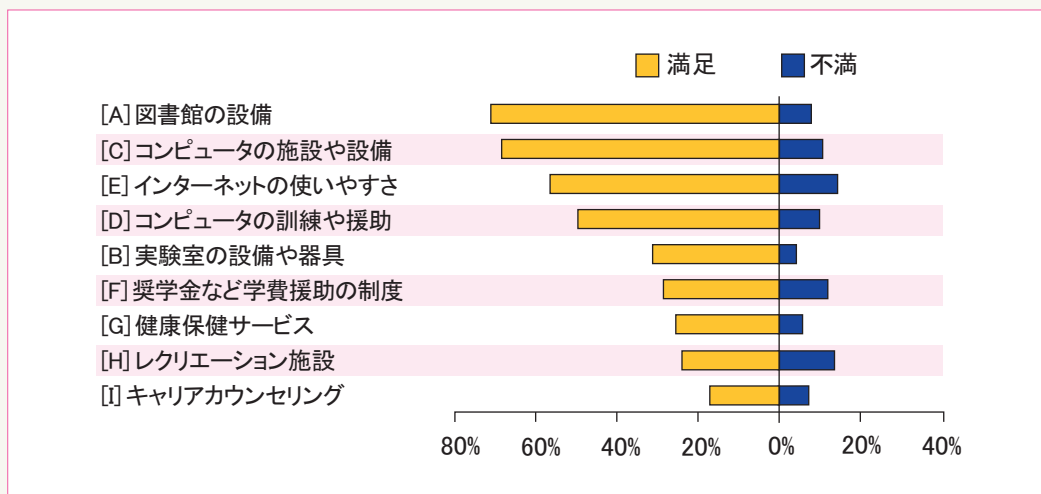


図5.6 大学の設備や学生支援制度に対する満足感（満足と不満の割合）

[注]

- 1) 本調査の結果からは、学生個々人の正確な活動時間に関する情報を得ることはできない。ここでは簡便法として、「全然ない」との回答を0時間、「1時間未満」との回答を0.5時間、「1-2時間」との回答を1.5時間、「3-5時間」との回答を4時間、「6-10時間」との回答を8時間、「11-15時間」との回答を13時間、「16-20時間」との回答を18時間というように、それぞれの選択肢内の中間をとって活動時間の平均を算出した。なお、「20時間以上」との回答については、そのまま20時間として計算しているため、平均値は実際の活動時間よりも短く見積もられている可能性がある。